

中級レベルへの無理のない移行を実現する新しい初 級カリキュラムと教材

How to Improve Elementary Level Retention:
A New Approach and a New Text

Yoshiro Hanai: hanaiy@uwosh.edu

Shoko Emori: emoris@uwosh.edu

University of Wisconsin Oshkosh

AATJ 2020 Annual Spring Conference
March 19, 2020

問題提起

アメリカの高等教育の日本語プログラムの100-200番台と300-400番台のコースの履修者数の割合は2009年、2013年、2016年と一貫して5対1だと報告されている。(Looney and Lusin 50) 教師の重要な役割の一つが学習者をプログラムが設定する最終到達目標まで導くことであるとすれば、教師は責任を持って、多くの学習者が上のレベルまで学習を続けられないという現状を改善しなければならないと言える。

本プロジェクトの目標

今までのカリキュラムを批判的な視点から根本的に見直し、履修者の保持率に関わっていると考えられる問題点に具体的な改善策を試みることで、1学期目の日本語授業を履修した学習者の半数以上を300番台のレベルまで導くことを目指す。



本プロジェクトにおいて特に大きな変更を加えた2点

1. 文法・表現の導入法の見直し
2. 授業外学習・宿題の見直し

文法・表現の導入法の見直し

1. 今までのカリキュラムでの基本的な流れ

1. 導入対象となる新出文法や表現を集中的に取り上げて授業で導入
2. そのために必要な語彙を同時に導入
3. 導入した語彙・文法・表現を使って様々な練習を行い、設定した場面や状況で対象となる学習項目を使って会話ができるように練習
4. 次の新しい新出文法や表現を集中的に取り上げて、上の1～3を繰り返す

文法・表現の導入法の見直し

II. 今までの方法の問題点

ある文法や表現を集中的に取り上げて導入・練習する方法は、教師にとって授業が行いやすく、また対象項目の学習に集中できるため、学習者にとっても短期間で大きな学習成果が実感しやすい方法だと言える。しかし、次のスライドの引用にある通り、近年の実証研究で、このような導入・練習法は長期的な学習の成功という観点から見ると、大変非効率的な方法だということが分かっている。

文法・表現の導入法の見直し

II. 今までの方法の問題点(続き)

- “It’s widely believed by teachers, trainers, and coaches that the most effective way to master a new skill is to give it dogged, single-minded focus, practicing over and over until you’ve got it down. Our faith in this runs deep, because most of us see fast gains during the learning phase of massed practice. What’s apparent from the research is that gains achieved during massed practice are transitory and melt away quickly.” (Brown, Roediger and McDaniel 9-10)
- “The rapid gains produced by massed practice are often evident, but the rapid forgetting that follows is not.” (Brown, Roediger and McDaniel 47)

文法・表現の導入法の見直し

II. 今までの方法の問題点(続き)

つまり、ある文法項目や表現の取り立てという一般的に使われている教授方略は、300番台の授業の履修につながるような長期的な学習成果の達成には効率的な方法ではないということになる。授業である対象項目のみに焦点を当てている間は学習者も教師もその学習成果が確認しやすく、各課の終わりまでにはそれが使えるようになったと感じられるかもしれない。しかし、次の文法や表現の導入に移り、別の項目の学習が始まると、それに集中するあまり、既習項目の保持が困難になってしまう。もちろん、教師は新出項目の学習中に既習項目をなるべく多く使い、忘れてしまうことを防ごうとするが、既習文法や表現の数が増えれば増えるほど、全ての既習項目を授業で扱うのは困難になる。結果として、授業中に短期的な学習成果が示せても、学期が進むにつれて、それが前スライド引用中の「transitory and melt away quickly」の状態となり、300番台の授業を履修するまでの長期的な学習成果に結びつかない原因の一つになっているのではないかと。

文法・表現の導入法の見直し

II. 今までの方法の問題点(続き)

以上の問題点は、教授法略の理論ではBlockingとInterleavingという二つのアプローチの違いとして説明される。

Blocking	Interleaving
一つのスキルやトピックに集中して練習する方法	複数の関連のあるスキルを同時に練習する方法

文法や表現の取り立て導入と集中練習は正しくBlockingに当たると言えるが、多くの実証研究により、長期的な学習の成功のためにはInterleavingが有効であるという結果が示されている。300番台の授業までより多くの学習者を導くには、現行のBlockingを使った方法から長期的な学習の成功を目的としたInterleavingのアプローチへの変更が必要となる。

文法・表現の導入法の見直し

III. 今までの方法からの変更点

文法や表現の取り立て導入をやめて、文法的特徴を共有する様々な表現を同時に導入・練習した後で、徐々に個別の表現への練習に移行する。



利点

- 様々な表現を同時に導入するため、Interleavingの方略を使ったカリキュラムが構築しやすい。
- 脳科学の研究から明らかなように、それぞれの学習項目をより関連づけられた形で導入することで学習の長期的な保持につながりやすくなる。
 - 人は何かを記憶する時に「おおまかに似ているものを区別せずいっしょにまとめてしまう(池谷 214)」
 - 「「軸」になることを記憶していないと知識はふえていかない。」(出口 135)

文法・表現の導入法の見直し

IV. 今までの方法からの変更の具体例

変更前

「～ておく」「～かもしれない」「～時」のように様々な表現を個別に取り上げて導入し、それぞれの表現が使えるようになるまで一つ一つに集中して練習し、その後、次の文法や表現に移る。結果として、学習者には、これらの学習が100以上の個別項目の学習として受け取られる。



変更後

「～ておく」はテ形表現として、「～かもしれない」は文末表現として、「～時」は複文表現として、これらの文法的特徴を共有する他の表現と一緒に導入する。その結果、学習者は次のスライドにある10の文法ポイントを通して、様々な表現を関連づけた形で学習することができる。

文法・表現の導入法の見直し

V. 10の文法ポイント

1. Particles & Sentences with Predicate Verbs
2. Verb Conjugations
3. Basic Conversation
4. Sentences with Predicate Nouns & Adjectives
5. Conjugating and Using Short Forms
6. *Te*-forms
7. Verb Conjugations That Add Meaning: Desire, Potential, Passive & Causative
8. Noun Modification
9. Sentence-Final Expressions
10. Complex Sentences

<http://learnjapaninjapanese.com/ten-grammar/>

授業外活動・宿題の見直し

1. 今までのカリキュラムでの授業外活動・宿題

(例)

1. 教科書のワークブックを「文法」と「聞く練習」の宿題として提出
2. 教科書の読み物を使ったワークシートを「読む練習」の宿題として提出
3. 漢字を書く練習と漢字を使った文を読む練習のワークシートを「漢字の宿題」として提出

授業外活動・宿題の見直し

II. 今までの方法の問題点

今までの宿題は提出物を確認できるため、教師は学習者の学習成果が確認しやすく、学習者は教師に誤りを指摘してもらうことができる。しかし、このような宿題は、学習者が返却物を1度確認した後で、時間の間隔を開けて再び確認するようには作られていない。以下の脳科学の研究に基づいた引用にあるように、繰り返しのない活動は長期的な学習には結びつかないということを考えると、このような宿題は学習成果の評価手段にはなっているとしても、授業外での効率的な練習になっているとは言い難い。

- いくら記憶したところで時間とともに忘却していくので、いいタイミングで反復学習をしなければならない。
(出口 116)
- 科学的にもっとも能率的な復習スケジュールは、まず一週間後に一回目、つぎにこの段階から二週間後に二回目、そして、最後に二回目の復習から一ヶ月後に三回目、というように一回の学習と三回の復習を少しずつ間隔を広くしながら二ヶ月かけて行うことです。(池谷 208)

授業外活動・宿題の見直し

II. 今までの方法の問題点(続き)

さらに、このような新出項目の学習に焦点をおいた宿題が中心になっていることで、学習者は既習学習項目の保持のための活動に十分な時間が費やせていない可能性がある。授業外でのこのような活動が学習に悪影響を及ぼすとは考えにくいですが、宿題がより効率的な学習に時間を費やすことを阻害している可能性があるということ、次のスライドにあるような研究で既に報告されている。

授業外活動・宿題の見直し

II. 今までの方法の問題点(続き)

“opportunity cost account of the negative relationship between HWTime and outcomes posits that the amount of time spent on assigned homework can affect outcomes in a counterintuitive manner by way of preventing students from spending time on activities that would help them to perform better on the given outcome measures. In other words, spending time on homework may hinder, rather than help, students, because assigned homework imposes an opportunity cost of not engaging in tailored and/or self-regulated study activities that may provide a greater benefit to students’ performance on these measures. This does not exclude the possibility that assigned homework may contribute positively toward other FL learning goals that are not captured in the given outcome measures. However, the basic argument in this account is that traditional homework (i.e., homework assigned generically to a class at large) is not particularly helpful with respect to these outcome measures, and, therefore, spending a lot of time on this kind of homework instead of more beneficial study activities is detrimental to outcomes. (Chang, Wall, Tare, Golonka and Vatz 1061)

授業外活動・宿題の見直し

III. 今までの方法からの変更点

最適な間隔を保ちながら反復練習を行うために作られた学習アプリを宿題として課す。学習アプリは、新出項目の学習と既習項目の保持という二つの目的が達成できるデザインにする。



利点

- 長期的な学習の成功に不可欠な反復練習を確実に行わせることができる。
- 全ての練習を一つのアプリにまとめることで、全てのスキルを毎日練習させることができる。
- 今まででは学習者の努力に任せていた単語の学習と保持の練習もアプリに含めることで、学習者は基本的に宿題(学習アプリの使用)さえしていれば、確実に学習を進めることができる。
- 各学習者が自分の学習進度に合った練習を行うことができる。

授業外活動・宿題の見直し

IV. 今までの方法からの変更の具体例

変更前

教科書のワークブックや教科書の読み物に基づいて作成したワークシートを主な宿題として課し、指定された提出日に出させ、添削して返却。



変更後

学期初日に学習アプリAnkiとそれを使って作成したフラッシュカード形式の練習をダウンロードさせ、それを使って練習することを毎日の宿題として課す。

<http://learnjapaninjapanese.com/anki/>

プロジェクトの現在までの成果と今後の展望

- 10の文法ポイントを通しての導入と学習アプリを使った練習により、初級文法と基礎表現を今までよりかなり短い時間でカバーし、初級の残りの時間をより応用的な運用練習に当てるカリキュラムに変更することができた。
- このような学習内容の増加にもかかわらず、日本語1学期目から4学期目までの履修者の保持率は向上した。(300番台への継続率は来学期に判明。)
- 留学に関して、100番台の日本語授業を履修後、日本語2年生に当たる1年間、または3学期目か4学期目の1学期間に日本での学習を希望する学習者が増加した。以前は留学希望者が主に300番台以上の授業を履修する学習者だったことを考えると、カリキュラムの変更が学習の早い段階での留学意欲を高める一因になったと言えるだろう。これらの学習者は帰国後に300番台の授業を履修するようになるため、早い段階での留学者数の増加は好ましい傾向だと言える。
- 今後は、さらに教材を充実させることで、さらなる履修者保持率の向上が期待できるだろう。

最後に

日本語初級レベルから中級レベルへの移行の難しさは長い間認識されており、それは履修者の保持率にも反映されている。しかし、前向きに考えれば、この状況は、この問題の解決が履修者の保持率の改善、ひいては全体的な履修者数の増加に直接的に結びつくことを意味する。幸い、近年の研究やテクノロジーの発展は、現場の教師にこの問題に対して抜本的な解決策を講じる知見と手段を提供している。アメリカの外国語教育界でプログラムの縮小や閉鎖が増えている昨今において、この問題を現場の教師が解決しなくてはならない急務の課題として捉え、批判的な観点から現行カリキュラムを見直し、実証研究に基づいた具体的な取り組みを行う意義は大きいと言えるのではないだろうか。

参考文献

- 池谷裕二. 記憶力を強くする: 最新脳科学が語る記憶のしくみと鍛え方. 講談社, 2001.
- 出口汪. 出口汪の「最強！」の記憶術. 水王舎, 2015.
- Brown, Peter C., Henry L. Roediger III, and Mark A. McDaniel. *Make It Stick: The Science of Successful Learning*. The Belknap Press of Harvard University Press, 2014.
- Chang, Charles B., Daniel Wall, Medha Tare, Ewa Golonka, and Karen Vatz. “Relationships of Attitudes Toward Homework and Time Spent on Homework to Course Outcomes: The Case of Foreign Language Learning.” *Journal of Educational Psychology*, vol. 106, no. 4, 2014, pp. 1049-1065.
- Looney, Dennis, and Natalia Lusin. *Enrollments in Languages Other Than English in United States Institutions of Higher Education, Summer 2016 and Fall 2016: Final Report*. Modern Language Association, 2019.